

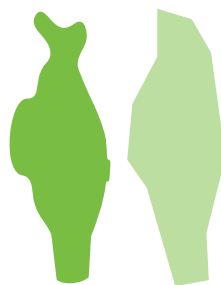
The One Who Carries

地球生物の内部から、文明を観察する。
この生物は彼らの物資を運搬していたようだ。

『The One Who Carries』

発行日 3025/02/13
発行者 AUISYHIDAK
連絡先 AUISY@glxy.ginga.ac.pp

排出器官に、魚の形をした容器。
生命は、調味料として象徴化されていた。

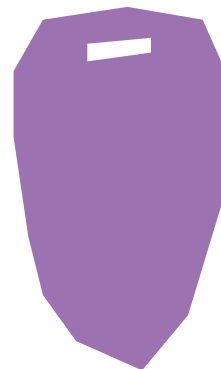
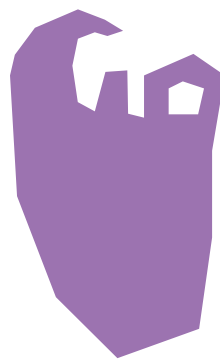
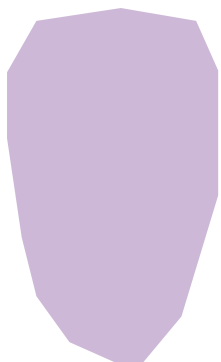
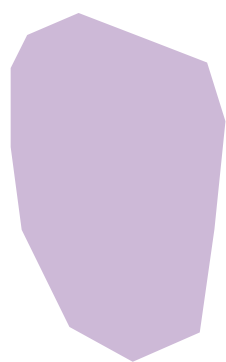
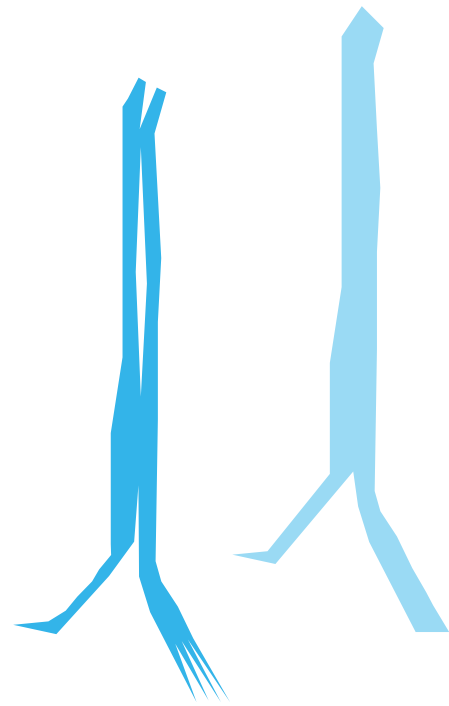




流動物専用の管が、なぜ生物の内部に留まり続けるのか。
彼らは“一時的”という概念を信仰していた可能性がある。

発声器官に似た食事のための道具。

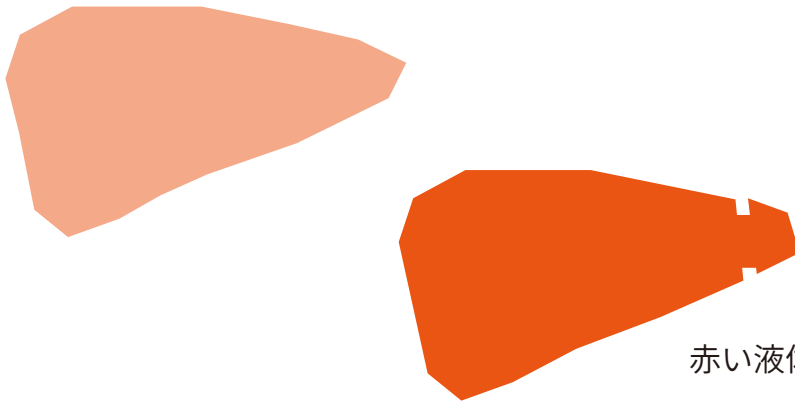
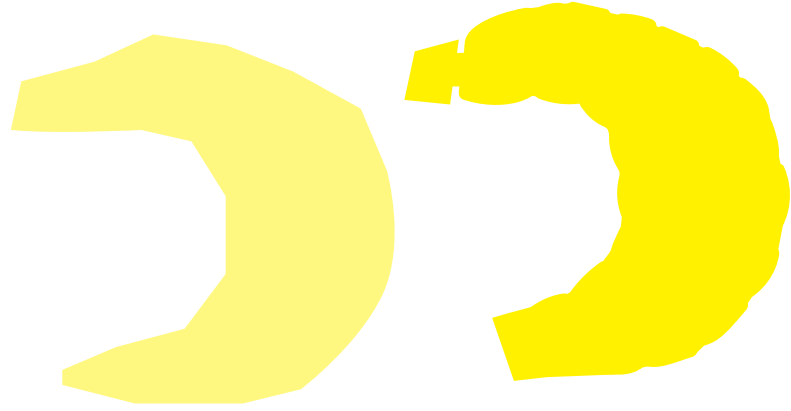
食べることに、区別することは、同時に行われていた。



呼吸器官に、空気ではない膜が入っている。

この生物は、呼吸より“運搬”を優先したのかもしれない。


彼らはいつでも摂取できる状態を愛していた。
摂取は、必要ではなく可能性として保存されていた。



赤い液体は、栄養ではなく装飾だった。
味は、均一であるほど安心されたらしい。

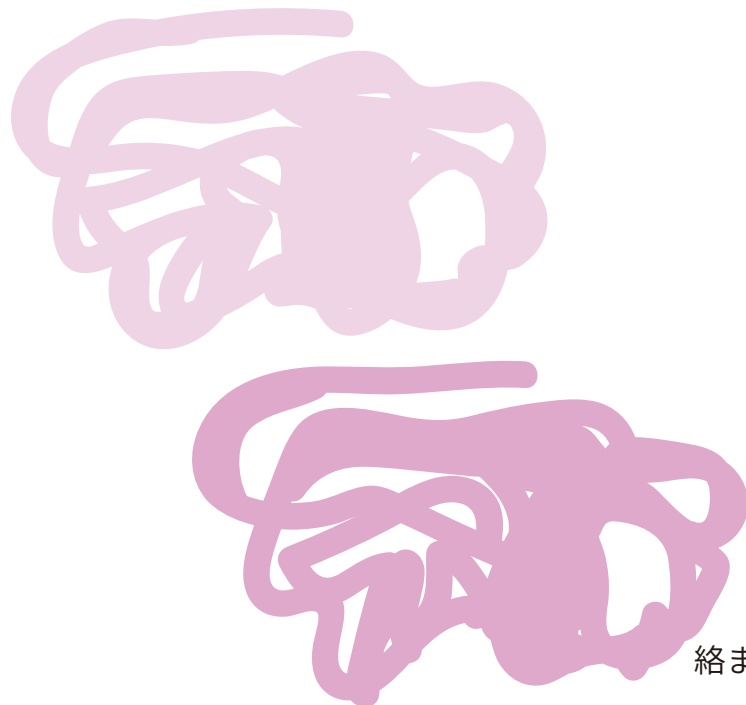
光源が、消化器に近い場所で発見された。
昼と夜の区別を、彼らは拒否していた可能性がある。



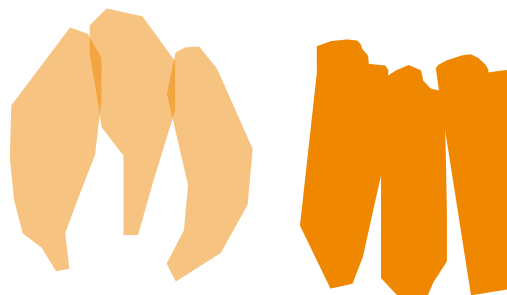


感情と栄養が、同時に摂取されていた痕跡。

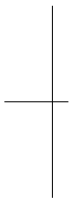
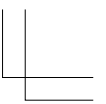
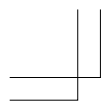
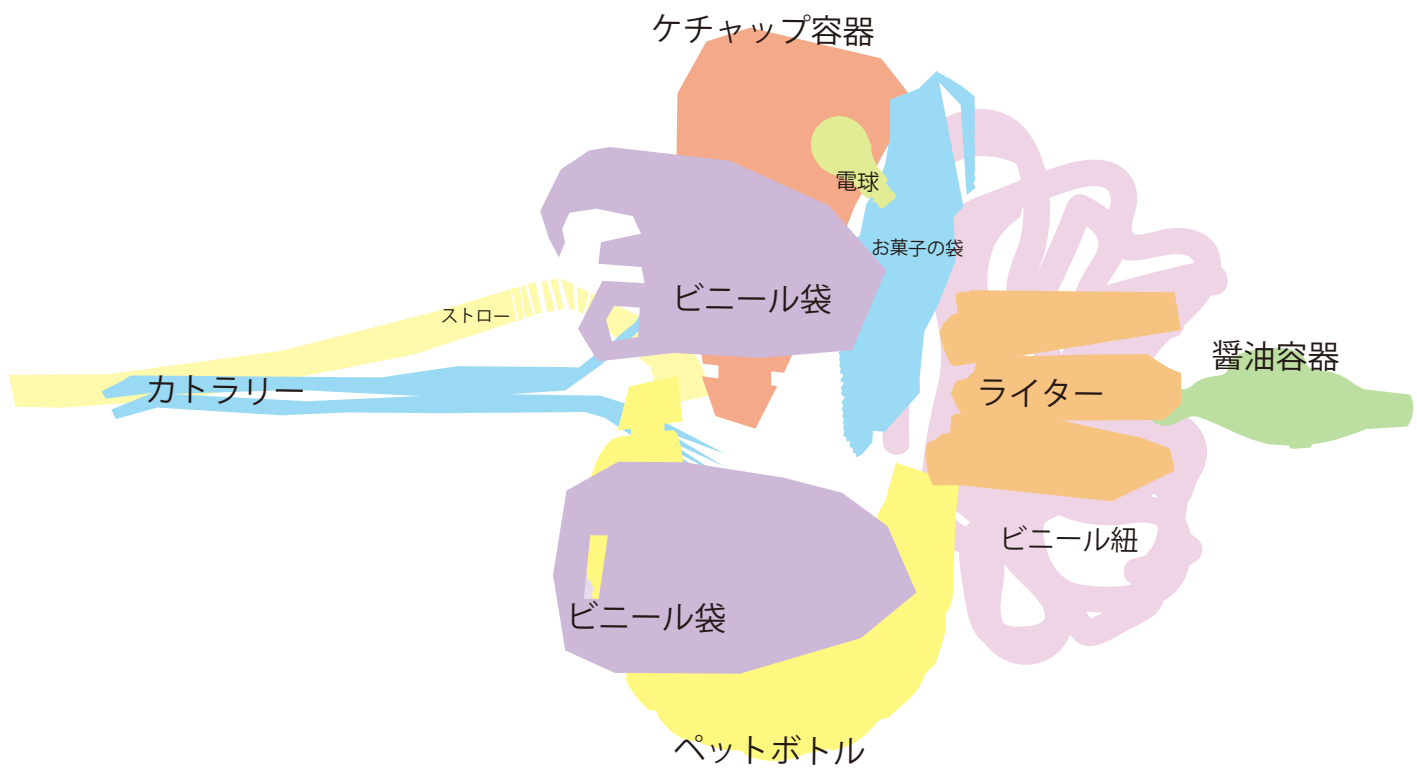
甘味は、個人単位で管理されていた。



絡まり、解かれ、再び絡まる素材。
彼らの思考構造に似ている。



排泄器官付近から、複数の発火装置。
制御できる火は、携帯されるべきだった。



この生物は滅びた。

だが、生活は非常に詳細に保存されている

